和田合戦

1213 年、鎌倉幕府で勢力を誇った和田義盛の一族が滅亡した戦です。将軍実朝と執権義時を廃し、故将軍頼家の遺子栄実の擁立にかかる企て（泉親平の乱）に関わり失敗した甥の胤長が首謀者として配流され（後に処刑）、さらには一族に給わるはずの胤長の屋敷まで没収されました。義盛は、「屈辱を受けた」とする若衆に押される形で北条氏に向けて蜂起しました。

しかし義村は義盛に味方するという起請文を書きながら変心し、義時に義盛の挙兵を伝えます。これにより謀反人とされた義盛らは滅亡しました。

和田塚（鎌倉市）

【登場人物その五】

和田義盛 わだ よしもり（1147～1213）

三浦大介義明の長子杉本太郎義宗の子。庶流ではあるが、御家人を統率する初代の侍別当（後の侍所別当）となりました。都では、和田義盛が三浦一族の長とみられていました。奥州征伐にも加わっており、浄楽寺の阿弥陀三尊像の造立は、その成功を祈願したものとも、北条時政の伊豆願成就院の建立に対抗したものともいわれています。なお、孫の朝盛は、和歌を通じて三代将軍実朝に近く侍った学問所番でした。

実朝関連情報

神奈川県立大船フラワーセンターには、源実朝の『金槐和歌集』に詠まれた樹木が多くあり、ゆかりの和歌とともに紹介されています。

【ゆかりの場所 その参】

浄楽寺

Map F-9

浄楽寺の開創は明らかではありませんが、1189 年に和田義盛が夫人小野氏と共に発願し、運慶により造像された仏像 5 体がその起源とされます。全国に 18 体あるとされる運慶真作に含まれ、いずれも国の重要文化財に指定されています。また全国でも運慶作の阿弥陀三尊像が揃っている作例は唯一といえます。いずれも檜の寄木造りで、阿弥陀三尊には神秘的かつ格式の高さを表現した彫眼を用い、毘沙門天・不動明王には写実的で力強い玉眼が用いられています。この彫眼と玉眼の使い分けには運慶の信仰を感じ取ることができます。和田義盛は仏教に篤く、三浦半島に多くの寺院を建立し、数々の造仏を行ったとされますが、現在では浄楽寺だけが、開創当時の運慶作の仏像を安置しています。

【拝観】 要予約（拝観料 500 円、一般公開 200 円）
一般公開　毎年 3 月 3 日、10 月 19 日
※浄楽寺 WEB 予約フォームより予約
【問合せ先】 電話 046-856-8622　横須賀市芦名 2-30-5
【行き方】 JR 逗子駅から「大楠芦名口行き」または「横須賀市民病院行き」他バス停「浄楽寺」下車すぐ（バスの所要時間約 30 分）
雨天時は文化財保護のため、拝観をお断りする場合があります。

【ゆかりの場所 その四】

清雲寺

Map I-9

滝見観音像（清雲寺）

清雲寺の縁起では、第3代衣笠城主三浦義継が父為継（1108年没）の供養のために建立し、父に似せた毘沙門天像（県指定重要文化財）を彫らせ本尊としたといわれています。しかし、その技法から鎌倉後期、運慶の系統を引く仏師による作ともいわれています。

現在の本尊「滝見観音」は、もともと近くの円通寺（廃寺）の本尊でしたが、江戸後期にこの寺に遷されました。縁起では滝見観音は為継の父為通（1083 年没）が請来したといいますが、その造立は南宋時代（1127～1279）で年代が合わないため、承久の乱後、宗像社領（福岡県）の預所となった三浦泰村が大陸貿易の中で請来したと考えられています。

滝見観音は、膝を立てた半跏像（遊戯像）で、中国産の堅い桜桃の寄木造りです。目にはガラス様の玉をはめ込み、毛髪、瓔珞などは中国独特の練物です。本堂裏には近くの円通寺（廃寺）のやぐらから移された三浦為通・為継・義継の 3 代の墓と伝わる五輪塔があります。

【拝観】 拝観要予約（志納金）
【問合せ先】電話 046-836-0216　横須賀市大矢部 5-9-20
【行き方】 京急北久里浜駅から「大矢部・新岩戸団地循環」バス停「大矢部 3 丁目」下車徒歩 6 分

【三浦氏宗家 滅ぶ】

【登場人物その六】

三浦泰村 みうら やすむら（1184 ～ 1247）

義明の曾孫にあたる。父義村から相模・河内・土佐の守護を継承し、さらに、若狭守を歴任し、幕府の重大案件を都に伝える東使役を務めました。また、筑前国宗像大社領・筑後国神崎庄を預かり、宋との貿易権を獲得し大きな力を持ちます。陰りが見え始めたのは父義村が急死し、北条氏から娶った 2 人の妻と、烏帽子親で執権の泰時が相次いで没した頃です。さらに最大の理解者・前将軍頼経が帰洛させられました。

宝治合戦

伝 三浦氏やぐら（鎌倉市）

関白九条道家は、三浦義村の奏上により、2 歳の時に鎌倉殿として下向した子頼経を養育した三浦氏を執権にしようと画策しましたが、これが露顕して道家は失脚し、三浦氏は後ろ盾を失いました。三浦氏を疎ましく思っていた執権北条氏の外戚安達氏は、三浦氏滅亡に追い込む千載一遇の好機とみて、戦いを仕掛けました。1247 年 6 月、自邸に火をかけられた泰村は、頼朝の廟所（法華堂）に籠り、一族五百余名と共に自害します。自らの顔を刀で削り悔しさをあらわにした光村とは対照的に、兄泰村はその血で頼朝の御影を汚してはならない、とたしなめたと伝えられています。

この宝治合戦により、三浦氏宗家は滅びますが、庶流の佐原義連の子らが、北条方について生き残り、五男の盛時が「三浦介」を継承します。この後、三浦氏は新井城を築き戦国時代へと続いていきます。

【登場人物その七】

矢部禅尼 やべのぜんに
（1187 年頃～没年不詳）

三浦氏全盛時代に義村の娘として生まれ、北条泰時の妻となります。おそらく泰村の姉であろう。北条時氏を生み、執権の嫡母となる三浦一族トップの女性です。のちに、三浦氏庶流の佐原盛連に再嫁し、光盛・盛時・時連を生みます。宝治合戦では、北条氏との旧好を重んじ、子らを幕府に付かせて生き残り、その子盛時が「三浦介」を継承していくことになります。三浦郡矢部郷に居住する矢部禅尼に亡夫の遺領安堵状を届けた北条時頼は孫であり、のちに 5 代執権となる人物です。彼女は横須賀市の名のもととなった横須賀氏・美作国の高田城主や会津の守護葦名氏、秋田角館城主などに三浦の血統を伝えています。

【戦国期　三浦一族の血で油壺は･･･】

新井城合戦

三浦義同供養塔（三浦市）

三浦氏宗家が宝治合戦で滅んだ後、「三浦介」は、義明の末子である佐原義連の孫盛時の家系が受け継いでいきます。

戦国期には、その末裔三浦義同（道寸）が、相模国中郡（現在の平塚市辺り）と三浦郡のほぼ全域を掌握していたとみられています。

1512 年 8 月、相模国への進出を目指す伊豆の伊勢宗瑞（後の北条早雲）に岡崎城（現在の平塚市）で敗れた道寸は、逗子住吉城を弟に委ね、自らは三浦郡秋谷・長坂・林へと南下し、多くの兵を失って最後の詰城新井城に立て籠もることになります。一方、早雲は同年 10 月には、三浦氏を滅ぼすための向い城として、三浦半島入口に玉縄要害（鎌倉市）を構えました。新井城は、「巌険阻にして、獣も駆け登り難し」と称された天然の島城で、容易に落とせる城ではなく、早雲も兵糧攻めの長期戦を覚悟したといいます。

義同らは、丸 3 年の籠城を続けますが、『北条五代記』には、戦記物ゆえの誇張もあるでしょうが、義同・義意父子の最期の様子をこう伝えています。

「兵糧が底を尽くと、城主義同は今生の別れの盃を交わし、義意は最期の舞を舞い終えると家伝の大太刀を持ち敵中に討ち入り、四方八方へ逃げる者を散々に振り廻した。一払いに 50 人。その有様は夜叉羅刹の如き。義同は従者と枕を並べ自害。義意は“身は朽ちても頸は死なず”と大音声を発し自ら頸を掻き斬った。その形相は牙を向き眼は逆さに裂け、鬼髪は針の如く立ち、眼光は百錬の鏡に血を注ぎたるが如し…」。

義意 21 歳、85 人力、身の丈 2 m あまりの器量・骨柄ともに優れた人物であったといいます。義同の供養塔には「討つ者も討たるる者も土器よ、砕けて後は元の土塊」という辞世の和歌が刻まれています。こうして三浦郡は早雲の領有に帰し、小田原城を本拠とする後北条氏による相模一国の支配が完成し、三浦半島の盟主・三浦一族は滅びたのです。

義同らの自害は永正 13 年（1516 年）7 月 11 日、奇しくも、この 74 年後の同日、早雲の曾孫氏政が豊臣秀吉により自害させられています。

油壺湾（三浦市）

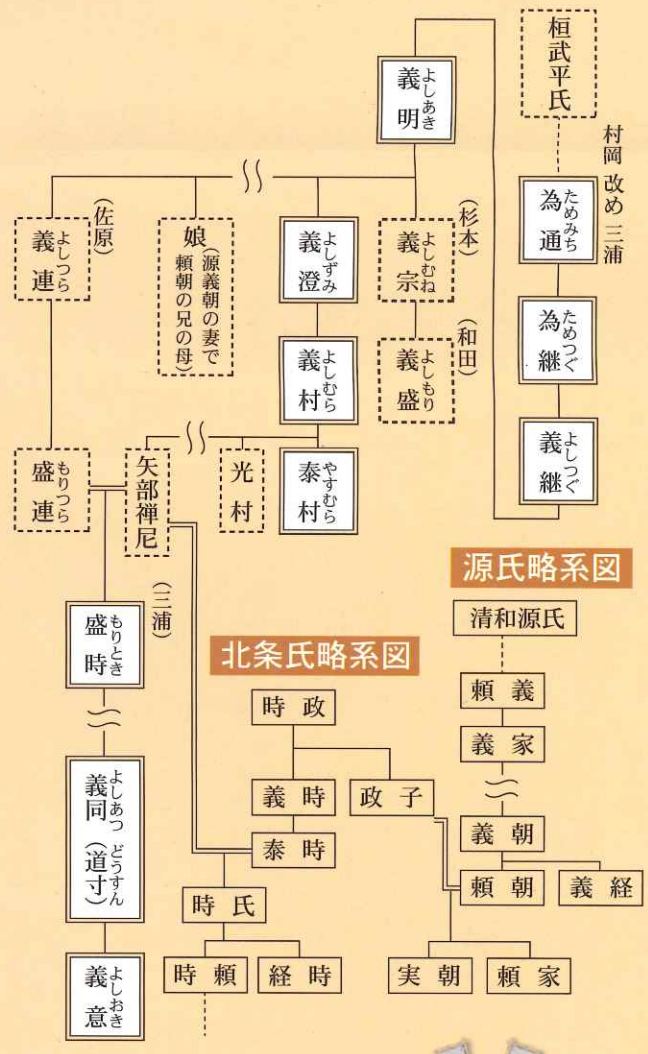
三浦一族関連略年表

永保 3 年	(1083)	後三年の役。衣笠城主・三浦為継が、後三年の役で源義家に従って以来、その恩禄を賜り、源氏累代の家臣となる。
平治元年	(1159)	三浦義澄、平治の乱に源義朝に従い参戦
治承 4 年	(1180)	【頼朝挙兵の年】
	6/27	義澄、伊豆に立ち寄り頼朝と挙兵の相談
	8/17	頼朝、伊豆で挙兵
	8/23	頼朝、石橋山合戦に敗れ安房に向け敗走 三浦一族は戦に間に合わず引き返す。
	8/26	衣笠城合戦。夜半、一族は義明を残して城を退去。衣笠城落城。三浦義明討死(89 歳)
	8/29	義澄、安房にて頼朝と合流
	10/6	頼朝、安房から行軍し鎌倉入り。宿館を定める。
	10/21	義澄、頼朝に「上洛より、まずは東国の平定を」と献言。
	11/17	和田義盛、侍所別当に任ぜられる
寿永元年	(1182)	佐原義連、北条政子の安産祈願のため三浦十二天(芦名十二所神社)に赴く
元暦元年	(1184)	義盛・義連、一谷合戦に加わる(鵯越え)
文治元年	(1185)	壇ノ浦の合戦で平家滅亡
文治 5 年	(1189)	義盛、奥州征伐の前に運慶に仏像の造立を依頼
建久 3 年	(1192)	頼朝、征夷大将軍に就任。義澄が除書(任命書)を受け取る大役を務める。
建久 5 年	(1194)	頼朝、義明追善供養のため寺院建立を発願
正治元年	(1199)	頼朝死去(53 歳)
正治 2 年	(1200)	義澄死去(74 歳)
建保元年	(1213)	和田合戦。北条義時に討たれ和田一族滅亡
承久 3 年	(1221)	承久の乱。鎌倉幕府軍が勝利し、後鳥羽上皇は隠岐に配流
延応元年	(1239)	義村死去(推定 70 歳)
宝治元年	(1247)	宝治合戦。北条時頼の外戚安達氏により三浦一族宗家滅亡。庶流の佐原盛時が三浦介を継承
永正13年	(1516)	新井城主の三浦義同、北条早雲に攻められ自害

三浦半島の三浦一族は滅亡しますが、義同の二子時綱が安房正木郷に逃れ正木氏を名乗り、その曾孫にあたるのがお万です。お万は徳川家康の側室となり、紀伊藩と水戸藩の祖を生み、徳川将軍は 8 代吉宗以降、幕末に至るまでお万の流れを汲む者が就任したことになります。

また、かつて三浦氏所領であった全国各地に一族の流れが続いています。

三浦一族関連略系図



鎌倉幕府と源頼朝没後の13人の合議制

源頼朝が鎌倉に幕府を開き、日本で初めてとなる武家政権を樹立しました。

鎌倉は、「三方を山に囲まれ、一方が海に開く」いわば天然の要害となる土地です。頼朝をリーダーとする武家は、鶴岡八幡宮を中心とした都市づくりに励み、切通と呼ばれる山を切り開いた通路や、物流拠点となる人工島等を整備しました。

頼朝の死後は、若くして 2 代将軍となった頼家を支えるため、頼朝に仕えた重臣から「13 人の合議制」の構成員が選ばれました。選ばれたのは、三浦義澄、和田義盛、北条時政、北条義時、大江広元、中原親能、安達盛長、梶原景時、比企能員、三善康信、二階堂行政、足立遠元、八田知家です。しかし、実際に一堂に集まって協議した形跡がないためか、合議制の存在を疑問視する説もあります。

その後、鎌倉幕府内で激しい権力争いが繰り広げられ、三浦氏は、北条氏に次ぐ実力者となります。しかし、北条氏にとって執権体制確立の最後の障害となった三浦氏宗家は、宝治合戦で敗れ滅亡しました。